

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 23

学校名・団体名	小千谷市立小千谷小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	戊辰150年！小千谷小「創学の精神」を伝えよう

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 目的

小千谷小学校は、戊辰戦争の最中にできた日本で最初の公立小学校である。学校の創設者「山本比呂伎」の想いや行動、学校を支えてきた人々の協力や願いを学び、「創学の精神」を地域住民や保護者に劇で発表することを通して、自分の郷土や学校に対する誇りや愛着の心を育む。

より良い劇になるように、演劇や報道に携わる外部講師の教えを生かして話し合ったり、子ども自身が映像を確認して練習したりすることを通して、相手意識をもって情報を発信したり、目的を共有して仲間と力を合わせる大切さを理解したりする。

2 活動の実際

(1) 学校の創生の歴史を学ぶ

①校区にある戊辰戦争に関わる場所を訪れて

5月、慈眼寺の「小千谷談判会見の間」を見学し、住職から話を聞いた。
6月、船岡山にある西軍墓地を見学し、ボランティアの方から説明を聞いた。

子どもたちは、戊辰戦争の戦地となった長岡藩の人々が逃れてきた歴史、その子どもたちへの教育の必要性を重んじ自らの私財を提供し建白書を送った山本比呂伎の想いを学んだ。また、所属に捉われず人を大切にす小千谷の先人の想いを感じた。

②校舎跡地のウォークラリー

11月、小千谷小学校は151年の歴史において、合併や統合、校舎の変遷を経ている。それらの跡地には、歴史を刻んだ石碑が建立されている。子どもは、グループに分かれ、校舎の跡地を巡った。お寺や市内の様子が見渡せる高台の跡地、現在は住宅地にある石碑等を見つけた。時代の移り変わりやそれぞれの時代と現在とのつながりを実感した。尚、ウォークラリーは7月に実施予定であったが、記録的な猛暑のため、時期を遅らせて実施した。



(2) 劇「学校の創生」の公演に向けて

1学期までの調べ学習での学びと学年目標「全員全力・全員主役」を基に、教師と子どもとの対話活動で次の目標を立てた。

劇「学校の創生」の発表で、多くの方に学校の歴史、先人の想い、自分たちの想いを伝える。

しかし、子どもは、伝えたいという願いはあっても、どのように表現すれば伝わるのかは、分からない状況であった。また、子どもの中には、多くの人の中で表現することに対して、不安を感じている子も多かった。

① 劇団員の先輩からの指導

市内で演劇活動をされている先輩から、「表現すること」を実感できる体験活動や劇の演技指導で何度も指導を受けた。練習を始めた頃は、自分のセリフを話すだけだった子どもが、相手のセリフを受け止めて、意味を考えて話すように変わっていった。また、どのようなジェスチャーを交えれば、より現実的であるかを考えるようになった。

役割や場面ごとに分かれての練習では、タブレットを用いた。子どもがお互いに演技を撮影し、気持ちが伝わるかどうかを話し合った。

② ラジオパーソナリティーからの講演会

10月、市内で収録されるラジオ番組のパーソナリティーの講演会を開催した。子どもは、人前で話すという仕事について、興味をもっていた。講演会に向け、教えてほしいことをたくさん考えていた。「大きくはっきりとした声で話すには」「緊張をしないためには」といった子どもからの問いに、発声練習等を交えながら答えてもらった参加型の講演会となった。

(3) 劇「学校の創生」の公演

10月27日(土)市民会館において、昼の部、夜の部をダブルキャストで2回公演した。校区の全戸にはパンフレットを配付した。

当日は、市長を始めとする来賓、地域の方々と合計約600人が市民会館に集まって、子どもたちの演技を鑑賞した。子どもたちは、いきいきとした表情で、堂々と自分の演技をすることができた。発表を終えた子どもたちは、仲間と喜び合い、達成感を口にした。当日の劇や当日までの取組の様子は、中越地区のケーブルテレビで放映された。



3 成果

児童アンケート『『自分の夢』や『なりたい自分』に向かってがんばっている』の肯定的評価は1学期末81.0%であったが、2学期末は87.8%であった。本実践を通して6年生の子どもは、人前で話すことや責任ある役割を担うことに意欲を高めている。また、演技指導を始め、地域の先輩と何度も関わることで、地域とのつながりを実感することや、将来の仕事について考え、記述することができた。